

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 4 月 26 日現在

機関番号：35408
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2010
課題番号：20520427
研究課題名(和文) 梵字音資料の日本語史的研究

研究課題名(英文) A HISTORICAL STUDY OF BONJI MATERIALS.

研究代表者
沼本 克明 (NUMOTO KATSUAKI)
安田女子大学・文学部・教授
研究者番号：40033500

研究成果の概要(和文)：3年間を通じての研究により、平安中期まで陀羅尼が梵字音の原姿を留めて日本で学習されていたことが確認されることになった。平安中期から梵語音が和化を進めていくが、梵語音と日本語音の馴化の手段として日本側の僧侶によって梵語に有る有気音の記述に双点が発明されたり、濁音記述のために濁音字母や濁点が発明され、更に拗音の表記法や撥音韻尾の書きわけの工夫によりそれらの音がやがて日本語音韻として定着した背景に、梵字の音読が密接に関与していたという見通しを確認することが可能になった。

研究成果の概要(英文)：As the result of this research for three years, I have proved that the learning of Dharani by Japanese monks in Japan had been in keeping the original sounds of Bonji characters until the middle of Heian period.

The readings of the Bonji in Dharani had advanced Japanization since the middle of the Heian period. For the method of assimilating the Bonji to Japanese, double-dots had been made as a means to express the aspirated sounds, and voiced initials and Dakuten had been devised for the voiced sound descriptions, by the monks. Furthermore, the notations of contracted sounds and the writing distinctions of syllables ending in the syllabic nasal had been carried out.

Those sounds and notations were soon established as a Japanese phoneme. In the background I was sure that the learning of original Bonji sounds in Dharani had participated closely.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語史、梵字音、悉曇学、密教

1. 研究開始当初の背景

日本語の歴史的研究は、和語を中心にこれに中国語がどの様に関与しながら変遷してきたかという視点で展開してきた。梵語との関係も論じられることがあったか、多くの場合語彙的な影響が論じられる程度であった。筆者は、訓点資料を利用して日本漢字音の歴史を論じてきたが、その過程で、漢訳仏典の源流となった梵語へ関心を抱いた我が国の密教僧、特に天台宗の円仁によって悉曇学が仏教研究の基礎に導入されて以後、日本語の発音や表記の展開及び発達に梵字音の影響が極めて大きくなっていったこと、したがって日本語の歴史的研究は、和語と漢語と梵語の三者の絡み合いの歴史として捉え直す必要が有ることに気づいた。その点について、筆者は漢字音史の一環として梵字音史や日本語表記の発達に論究する論文も発表してきた。

2. 研究の目的

上記の視点を徹底して究明するためには、梵字音資料を可能な範囲で蒐集し、それらの具体的な資料に基づいた専門的な研究が要求される。

(1)筆者は既に研究を始めた時点で、漢字音史料として利用する目的で、漢訳仏典中の陀羅尼音読史料を収集しデータベース化する試みを始め、大旨500点のデータベース化を完了していたが、これではどうてい不十分であり、本研究の目的の第一として、このデータベースの補充という目的を掲げて資料収集を行うことにした。

(2)研究の第二の目的としては、新しい資料としての梵字音資料の研究成果を加味した日本語史、特に音韻史・表記史を構築することを掲げた。特に以下の諸点に重点を置いた。

- ①梵字音の有声音と無声音の区別の書き分けがどの様な過程を経て日本語の清濁の書き分けとして発達していったかの詳細な過程を跡づけること。
- ②梵字音の有気音と無気音の区別がどの様な方法で書き分けられ定着し、更に波及していったかを跡づけること。
- ③梵語にのみ存在した音韻論的長短音の区別が日本側でどの様に認識され書き分けられて行き、またその区別のない漢

字音とどの様な相関を持って行ったのかを跡づけること。

3. 研究の方法

基本的には、未見の梵字音資料を収集しデータベース化し、それらに基づき分析を加えて所期の目的を遂行するという方法を実践した。

以下に年度ごとの資料収集と作業を示す。

(1)第1年度(2008年度)

高山寺経蔵所収の梵字音史料を閲覧の上、写真撮影した。この調査は年間2回実施した。

東寺観智院経蔵の梵字音史料を閲覧の上、移点作業を行いデータベースの資料とした。この調査は年間1回実施した。

石山寺経蔵の梵字音史料を閲覧し、写真撮影した。この調査は年間2回実施した。

奈良国立博物館所蔵の「悉曇蔵」八巻の閲覧を申請し、写真撮影と移点を行いデータベースの基礎資料とした。1回実施した。その後、本書の分析を行い、第八巻の「悉曇章」に加点されている仮名が、梵字音資料として重要なものであること漸次判明しつつあり、今後学界公表を期している。

以上、初年度の研究は、主として梵字資料の収集を中心とした。本年度の研究成果は、別記の如く、既に蒐集していた法華経陀羅尼の梵字音史料に関する雑誌論文である。

(2)第2年度(2009年度)

高山寺経蔵所収の梵字音史料を閲覧の上、写真撮影した。この調査は年間2回実施した。

東寺観智院経蔵の梵字音史料を閲覧の上、移点作業を行いデータベースの資料とした。この調査は年間1回実施した。

石山寺経蔵の梵字音史料を閲覧し、写真撮影した。この調査は年間2回実施した。

以上、第2年度の研究も梵字資料収集を中心に行った。本年度の研究成果は、別記の如く、高山寺蔵の胎蔵界儀軌に於ける梵語音訳字と併記梵字とによる梵字音の実態の究明と、大般若経所収陀羅尼の史の変遷についての究明と、陀羅尼部に加点された仮名による声調表示法の源流を究明した雑誌論文である。

(3) 第3年度(2010年度)

高山寺経蔵所収の梵字音史料を閲覧の上、写真撮影した。この調査は年間1回実施した。東寺観智院経蔵の梵字音史料を閲覧の上移点作業を行いデータベースの資料とした。この調査は年間1回実施した。

石山寺経蔵の梵字音史料を閲覧し、写真撮影した。この調査は年間2回実施した。

以上最終年度の調査は主として高山寺、東寺、石山寺の確認調査を行った。本年度の研究成果は雑誌論文として、法華経音義に於ける漢訳陀羅尼の扱いをてがかりとした梵語音読の和化度の究明、法華経の梵字陀羅尼の諸本の比較対照と異文発生の背景を論じた雑誌論文である。

4. 研究成果

研究成果は幾つかの項目に亘る。以下に5項目に分かって記述しておく。

① 研究を開始する前までの時点で、大凡500点の資料のデータベースが完成していたが、本補助金による3年間の研究の結果、約700点のデータベースにすることが出来た。このデータベースには、所蔵者、書名、書写時代、奥書等の書誌的データの他に、訓点(ヲコト点の系統)、声点(星点、圈点、双点等その形態の情報)、仮名の有無、梵字本か漢訳本か梵漢併書本かの情報、加点部分の情報、濁音字母の有無、濁点の有無、三内撥音韻尾表記の情報等を掲載した。

② 有気音と無気音の表記の発生と消滅について、新資料を加えることによって従来の見通しを更に確実に描くことが可能になった。即ち、平安初期の天台宗に於ける「悉曇章」の学習の場で考案され、それが儀軌に収載された陀羅尼の梵語としての発音表記に利用されるようになり、更に平安中期に至って漢字音(漢音)に波及していった。平安後期末に至って、梵語音の発音と漢音の発音が完全に和化を完了するに従ってその書き分けも消滅したことが明確になった。

③ 梵語の有声音と無声音の区別の書き分けは日本語の問題としては清音と濁音に相当するが、平安時代の訓点資料では一般にそれを書き分けないが、悉曇章や漢訳陀羅尼の加点にのみこれを書き分けている。平安初期当初においては濁音字母で

濁音を表記し、次の段階に濁声点で濁音を表記する方式へと変遷する。この書き分けは、当初梵語音の部分にのみしか使用されていない。新資料についても全く例外はないことが確認でき、従って清濁の書き分けは梵語学習の場から発生したものであったことが確定できることになった。

④ 日本語と中国語には音韻論的な長短の区別がない。梵語には長短の区別が存在した。所謂プロソディの在り方がずれていたことになる。中国人も日本人も梵語にある長短の区別の認識に苦心した。中国語においてはこれを四声(アクセント)の違いとして処理した。即ち唐代では梵語の長音を去声で、短音を上声で処理した。梵語を学習した日本の僧侶は、それを利用し、日本の悉曇学においては同じように、梵語の長音を去声で、短音を上声で書き分けている。この方式は密教系の訓点加点にも波及し、平安中期まで行われたが後期以後には消滅した。当該史料の梵語音がこの方式で加点されているかないかによってその時代の資料の成立が分かることになる。

⑤ 訓点資料の声点を調査していくと、仮名の位置を四声点の位置に加えて発音と四声を同時に示そうとして居る資料がある。これらの資料を集めていくと、天台系の加点から始まり真言系の資料に波及して行ったことが明らかになる。その他の宗派や博士家の資料には使用されていない。従ってこの形式の発生も天台系の梵語発音の記述の一形式として考え出されたもので、天台悉曇学の特殊性を構成する事象の一部であったことが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

① 沼本克明、日本における訓点資料の展開—音読の視点から—、「訓読」論—異文化理解と日本伝統文化の形成—、査読無、2008、123—15

② 沼本克明、法華経の陀羅尼の読誦について、安田大学大学院文学研究科紀要、査読無、14集、2008、1—19

- ③沼本克明、梵字陀羅尼の読誦資料について
一高山寺本胎藏界自行次第一、「平成 20 年
度高山寺典籍文書綜合調査団研究報告論集、
査読無、2009、76-90
- ④沼本克明、大般若經の陀羅尼の読誦につい
て、安田大学大学院文学研究科紀要第、査読
無、15 集、2009、1-19
- ⑤沼本克明、一切經に於ける写經と請来版經
との交渉 一石山寺一切經と宋版一切經一、
安田女子大学国文学論叢、査読無、2 号、
2009、1-18
- ⑥沼本克明、高山寺の一切經と請来版經、平
成 21 年度高山寺典籍文書綜合調査団研究報
告論集、査読無、2009、11-26
- ⑦沼本克明、仮名の位置による四声表示法の
源流について一陀羅尼訓点の一形態一、訓点
語と訓点 資料、査読有、123 輯、2009、1
-17
- ⑧沼本克明、法華經音義における法華經漢訳
陀羅尼字の扱い、安田大学大学院文学研究科
紀要、査読無、16 集、2010、1-18
- ⑨沼本克明、高山寺經藏の梵文法華經陀羅尼
について、平成 22 年度高山寺典籍文書綜合
調査団研究報告論集、査読無、2010、3-15

6. 研究組織

(1) 究代表者

沼本 克明 (NUMOTO KATSUAKI)
安田女子大学・文学部・教授
研究者番号：40033500